

展評

上村 豊

作品や会場の管理、対外的な広報活動、観客参加の仕組み、予算配分も含めた情報公開など、運営に関わる基本事項全般にわたり、さまざまな課題が不透明のまま残されていることも事実である。

それでも、関係者の継続

i Adi Nurron o、James Jack など国外からの参加作家は、アートならではの拡がりをもった新鮮な視点を示した。何よりも、各島・集落の風景や空間を深く体験できるのはこうしたサイトスペシフィックな作品鑑賞の醍醐味である。

美術館や画廊のように作品を展示・鑑賞するために保証された制度的空間と異なり、「イチハナリ」の展示サイトは、日常的で私的な領域の中に辛うじて拓かれた、大変繊細で儂い(それゆえに貴重な)「公共空間」であり、その存立には関係する全ての立場による合意と共同への意識的な努力が不可欠である。

合意と共同を目指して粘り強く行われるオープンエンドな対話のプロセスであろう。議論を始める前から問題の存在に(まさに)覆いを掛けてしまうような今回の市の行為は、自ら主催する事業の基盤を根本から否定するものであることを深く自認するべきであろう。会期の残り少ない中であるが、事態の打開に向けた動きが示されることを期待したい。

うるま市の島嶼地域を舞台とした「2107イチハナリアートプロジェクト+3」は、参加作品の1つが、「プロジェクトの趣旨に合わない」との主権者側の判断で非公開とされるショッキングな幕開けとなった。いわゆる「地域アート」

イチハナリアートプロジェクト+3 合意と共同目指し 終わりのなき対話を

の全国的な隆盛と「アートツーリズム」の流行の一方で、アートと地域振興を安易に結びつけることに対する批判的な議論も起こる中、6度目の開催となる同プロジェクトも、毎回試行錯誤を繰り返して、少しずつ成果を蓄積してきた。エンタリー制の導入と滞在制作への重点化により、参加作家の積極的な関与を促し、同時に展示サイトの拡充と共に受け入れ側の認識や理解の深化を図ってきた。

それだけに、関係者への内覧も済ませた作品を、会期直前に非公開にした強権的ともいえる措置は本当に残念である。これまでのプロジェクトが地道に時間をかけて積み上げてきたものを一気に崩し去りかねない暴挙ではないだろうか。

主権・共催者、事務局、キュレーター、アーティスト、地域コミュニティ、参加者・観客。それぞれに異なる関心・動機・目的のプロジェクトに加わる全ての人が、その基盤となるこ

的 な努力により、プロジェクトは確実に成長し地域に定着してきた。今回も、興座花織やsava、比嘉豊光など、場やコミュニティ

と日常的な関係を結び継続的な参加・制作を行う多くの地元作家の存在があり、また堀尾貞治やBud

意形成と共同関係の構築、

り、また堀尾貞治やBud



カバーされた岡本光博〈落米のおそれあり〉。奥は石垣克子作品=23日、伊計島共同スーパー

(琉球大学准教授)

◇ 「2017 イチハナリアートプロジェクト+3」は12月3日まで、うるま市の平安座島、浜比嘉島、宮城島、伊計島を舞台に、38人が58作品を展示している。入場料500円、中学生以下無料。会期中週末は島をめぐるシャトルバスを運行している。問い合わせは、うるま市観光協会 ☎098(9)78(0)077。